

HERO

Shinビーフストロガノフ

麻酔による感覚の喪失が消えてきた。だんだんと意識がはっきりとしてきて、

「フッフッフ……成功だ！ 成功したぞ！ フハハハハハハハ！」

と高らかに笑う少女の声が聞こえてきた。

麻酔のせいで頭が朦朧とする。体全体が重く、視界も少しゆらゆらと揺れている。長い間寝たきりになっていた気分だ。

「いつまで寝ているつもりだ？ 早く起きたまえ、英嗣^{えいじ}」

さっきまで高笑いしていた少女が、手術台の上で寝ている英嗣に話しかけてきた。

何か返そうと口を開くが、舌が動かず、声が出ない。まだ麻酔の効力が残っているみたいだ。めちやくちやだるく、うまいこと動かせない体を起こして声のする方を見る。

同じ中学校の制服の上に、ダボダボな白衣を着た、おさげ髪の少女——ツララがいた。

自称『世界一の天才美少女』とか名乗っている(自信過剰で本名不明)女の子だ。

後半の部分とはもかく。ツララは本物の天才だ。

英嗣と同じ年でヒーロー連盟にスカウトされた。

ヒーロー連盟とは全世界で活躍しているヒーローたちを統率し、彼らを支援する団体だ。それ以外にもヒーロースーツを開発している。

NASAの技術力を有して造られているほど複雑なヒーロースーツを、ツララは一〇歳の時に造ったのだ。それも簡易で量産しやすく。

二〇XX年——現在。

地球は人口の三分の一に匹敵する怪人が、いくつかの組織に分かれた怪人達は、世界征服を企んだ。

政府は怪人たちに対抗すべく軍事用に開発されていたパワードスーツ——別名ヒーロースーツと呼ばれるようになった対怪人用スーツを使用し、人類は怪人たちと壮絶な戦いを繰り広げていた。

今いる場所は、手術台や手術器具など一見すると手術室のような室内だが。ここはツララのラボだ。

ヒーロースーツを着るには、特別な手術が必要らしく。英嗣は、ヒーロースーツを着るための手術を受け、ヒーロースーツを造ってもらった。

子供達の永遠の憧れであり、無償で人々を助けるヒーローになる——なんてカッコいい理由ではない。むしろその逆で、ヒーロー連盟から配付される資金目当てでヒーローになろうと

している。

運のない両親のせいで、英嗣は一四歳で多大な借金を抱え混んでいる。

父が設立させた会社が倒産、母は数多くの詐欺に遭い続け：
：大卒サラリーマンの生涯年収二回分という、恐ろしい金額になってしまった。両親は一生かかっても返せない金額に途方に暮れて、夜逃げをしようかと本気で考えていた。

別に夜逃げをしてもいいと英嗣は思っていたが、妹が泣きじやくって行かない！ と駄々をこねていた。

それで英嗣は決心した。

どうしようもない両親はともかく、まだ幼い妹のためにも金を稼いで借金を返す。そのために一番手っ取り早くお金を稼ぐ方法として、ヒーローになった。

ヒーローと言うのは肩書きばかりで、傭兵と何ら変わらない存在になっている。ヒーローになるほとんどの理由が、英嗣と同じ資金目当てだ。ヒーロースーツの修理や怪我をした時などの治療費などを含めているためかなりの高額になっている。うまくすれば二、三年で借金を返せるかもしれない。

それなりに有名になれば、大企業がスポンサーになってくれる。ハリウッドスターやプロ野球選手など、足元にも及ばない給料をもらえる。そのまま億万長者だって夢ではない。

段々と舌の感覚が戻ってきて、「もう……終わったのか？」

とツララに訊く。

手術には一週間近くかかると聞いていたのに、手術室に置いてあった電波時計を見ると、四時間程度しかたっていないかった。

「無論！ この私にかかれば一週間かけなければならぬ手術も、数時間あればよゆうだ！」

無い胸を張って、気持ちがいいほど自信満々に言い切った。

それは安全面的な意味で大丈夫なのか？ と疑問が頭をよぎったが聞かないでおく。

他のことで忘れようと手術台から降りて、近くにあった全身鏡までおぼつかない足どりで行く。

ヒーローになる、とは言ったものの。どんなデザインのスーツになるかはツララに任せた。

ヒーローといえば、戦隊ものか光の星の戦士くらいの知識しかない英嗣は、いったいどんなモノがかっこいいかわからないでとりあえず、ごちゃごちゃしたアーマーのようなものではないだけなくしてシンプルに頼む、と頼んだ。

あまり完成系に期待していなかった英嗣だが、そこは男のサガなのか。少しかっこいい姿を想像してしまう。

期待と緊張をしながらも、いったいどのような姿なのか鏡を見ると――

「……おい……なんだこれ？」

自分の思っていた姿の斜め上空を飛んで行ったので、おもわ

ず声が出てしまった。

ヒーロースーツとかいう名前だから、ヘルメットでもかぶっている姿を想像していたが……。

鏡に映っていたのは棍棒——正確には野球のバットそのものだ。

名状しがたいバットのようなモノから、自身の手足が飛び出している姿が、鏡に映っている。

顔がないので、もはやバットの怪物だ。

「何って見たらわかるだろ。バットだ」

ツララの率直な答えに思わずツツコム。

「シンプルすぎるだろ！　なんだよこのスーツ！　手抜きにもほどがあるだろ！」

「お前がシンプルにと頼んできたんだろ？」

「確かに『シンプルで』とは頼んだけど。シンプルすぎるしかっこ悪すぎるわ！」

「最初は私も一生懸命考えていたんだが……某有名なバイクに乗っている仮面ヒーローや某有名なクモ男のようにかっこよくしようとアメリカの某有名会社に頼んでスーツのデザインを依頼して、超かっちょいいデザインだったのだが……デザイン料が異常に高くてそこで予算の八割が飛んで行ってしまったんだ」

「どんだけ高いんだよ！　そして無駄なところに費用使います

ぎだろ！」

「いやー、見えないところほど真面目にやったほうがいいかなーって」

頭をかきながらへ、と舌を出すツララ。

くそ。こんなことなら自分で考えるんだった。

「そんな無駄なことに使いやがって……こんな着ぐるみみたいなスーツで怪人と戦えんのか？」

どう見ても強くなさそうなスーツを鏡で見ながら言う。

「何を言うか！　そのスーツは、実用性二・五パーセント、遊び心四パーセント、厨学二年生の心一五パーセント、やさしさ〇・五パーセント、めんどくさくなって適当に造った八八%で造られている」

「つまりこんなかっこ悪くなったのはテメーのせいか！」

本気で女の子をグーで殴りたいと初めて思った。

「ちなみにやさしさ〇・五パーセントは嘘だ」

「ヒーローとして一番ぬいちゃいけない要素がぬけちゃったよ……」

「まあいいではないか、最近はダークヒーローも人気みたいだから大丈夫でしょ」

「何が大丈夫なのかさっぱりわからんが……」

「細かいことを気にするな。本物の怪人と戦う前にロボットと模擬戦をしたまえ。『バットマン』よ」

「その名前って著作権とかに引っかけあるんじゃないか？」